新日本探偵社
報告書控

tsutsui yasutaka

筒井康隆

集英社文庫

集英社文庫

新日本探偵社報告書控

1991年4月25日　第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者　筒井康隆

発行者　若菜正

発行所　株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋2—5—10
〒101-50
電話　東京（3230）6100（編集）
（3230）6080（販売）
（3230）6080（製作）

印刷　大日本印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© Y.Tsutsui 1991

Printed in Japan

ISBN4-08-749702-X C0193

集英社文庫

新日本探偵社報告書控

筒井康隆

集英社版

新日本探偵社報告書控

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

——従兄・筒井敏夫へ

1

浪速ビルは大阪市西区信濃橋にあり、四ツ橋筋に面していた。昭和二十六年十月、そのあたりは焼け残りのビルや新築の商店のために表通りからは遮られているものの、まだ焼け跡が残っていた。浪速ビルも表通りから見ればコンクリート四階建てだったが空襲で裏半分が崩壊し、その部分は敗戦後に建てられた木造二階建てだった。ビルの部分は新関西通信社という映画・演劇関係の新聞広告を扱う会社が占めていたが、木造部分には十数室ある各部屋に小さな会社が雑居していた。新日本探偵社の事務所は二階の廊下右側、奥からふたつ目の部屋だった。そこは四坪の事務所で、開けても隣りの建物の壁面しか見えない窓がひとつ、ドアの向かい側にあった。廊下に面している窓もあったが摺りガラス入りで、開けられたことはなかった。

室内には机が四つあり、うち三つは常時十人以上いる所員が交代で使っていた。あとのひとつが所長である辰巳秀雄専用の机で、書棚の前に置かれていた。片隅にはパイプの丸椅子が十脚、積みあげられていた。ちょうど大企業の就職内定者の個人調査が集中的に行われる時期なので、ほとんどの所員は各地方に出かけていた。事務所には辰巳と、所員の白石がいるだけだった。

白石は二十七歳でまだ独身だった。三カ月前、使ってやってくれと課長の石黒がつれてきた時には、堺の刑務所を出所したばかりでまだ髪も短いままだった。なぜ服役したかを訊ねても要領を得なかった。

「喧嘩に巻きこまれましたんや」

「誰か、死んだんか」

「死にましてん」

「仕事する気、あるんか」

「はあ。なんでもやります」

石黒に訊ねても、ものの間違いで巻きこまれただけであり、罪状もたいしたものではなかったとしか答えなかった。辰巳は比較的、石黒課長を信用していた。

だが、白石は怠け者だった。役に立たず、ほとんどなんの仕事もしなかった。辰巳の下に課長が三人いた。それぞれの課長が三人から四人の部下を使っていたが、どの課長も白石だけは使いきれず、もてあました。

辰巳は石黒に言った。「あれ、あかんで」

「まあ、もうちょっと使うてみてくれまへんか」石黒は申しわけなさそうに笑ってそう言った。

辰巳は白石を直接自分が使ってみることにした。ちょうど京阪チューブという中企業から雇傭調査の依頼があり、人手がなかったので辰巳は自分が担当し、白石と共に調査をした。工員の雇用であり、これは大企業の就職内定時期とは無関係に、年中依頼があった。

白石は役に立った。調査対象である太田宗治という工員に年齢が近かったためか、本人や家族に接近して詳細に調べあげてきた。辰巳は白石の報告と自分の調査を綜合し、報告書をまとめているところだった。白石は辰巳と向かいあった席に腰をかけ、天井を見ていた。白石の眼が、うつろに感じられた。虚脱感に捉えられているようにも見えた。別の仕事を言いつけておいたのだが、出かけようとする気配はなかった。またもとの怠け者に戻ったことを辰巳にわからせたいような態度でもあった。調査した内容がよくなかったのかもしれないと辰巳は思った。そんなことを思いながらも、彼は報告書を書きあげた。

調査報告書

京阪チューブ殿

調査対象　名称　太田宗治
　　住所　布施市荒川一の十九
特記事項　雇傭調査・特ニ家庭及ビ思想状況

一、家庭状況

同家ハ表通リニ面シテイルモノノ附近ハ日雇労働者・工員等ノ下級生活者ガ多ク、同家モ同様ニ、二階建テデハアルガ古イ家屋デアリ、一見シテ見苦シク、乱雑サト汚レヲ呈シテイ

ル。環境ハ不良デアル。

家族ハ、母　太田トキ　五十一歳　無職
兄　〃　徳治　三十一歳　工員
兄　〃　清治　二十九歳　不定職
本人　〃　宗治　二十五歳　工員
弟　〃　正治　十八歳　工員
弟　〃　栄治　十二歳　小学生
妹　〃　吉子　十一歳　小学生

ノ、七名暮シデアル。

父兼治ハ、大阪天神橋六丁目ヨリ布施市ニ引越シ、中河内郡花園ノカレンダー製造工場ニ工員トシテ二十数年実直ニ勤務シタ後、高井田ノ紙工場デ二年間働イタ。ソノ折、昭和二十二年ニ外出中心臓麻痺ニヨッテ五十歳デ死去シタ。

母トキハ、夫死亡後、子供ノ収入ヲアテニシテイルダケニ、子供ニハ放任的デアル。ソノタメ子供タチモ、ヤヤダラシガナイ。シカシ母ハ、気持ノサッパリシタ好人物デアリ、近所トモ良ク交際シ、金ノナイ時ナドハ気安ク借リルヨウナ関係ニアル。

長兄徳治ハ、木崎ポンプニ勤メ、一家ヲ背負ウ責任カラ真面目ニ働イテイル。仕事ガ忙ガシクテ休ミモ少ク、娯楽ハ映画ダケデアル。

次兄清治ハ、兄弟中デ最モ素行悪ク、定職モナク、ブローカー的ナ仕事ヲシテイルガ収入トシテ家ヘ入レルホドノ稼ギモナク、家ニ定住セズ、母ノ苦労ノ種トナッテイル。

弟タチハ年若ク、取上ゲル程ノコトハ何モナシ。
同家ハ、財産トシテハ何モナク、借家（下二間、二階二間、十二坪位）ヲ月七五〇円デ借リ、収入トシテ徳治八〇〇〇円、宗治正治各四〇〇〇円デ、辛ウジテ生活シテイル。

二、本人ノ状況

宗治ハ、小学校卒業後、俊徳道駅近クノ大阪足袋製作所ニ七年数カ月勤メ、遅刻ガ一回アッタノミデ欠勤ガナク、褒メラレテイル。ソノ後栄和製作所ニ勤メタガ、経営不振カラ数カ月ノ給料未払イトナッタ。ソレデモ働ラカサレタガ、不払イガ三カ月分一二〇〇〇円トナッタタメ退社シタ。七月ニ兄徳治ガ会社ニ交渉シタガ、内五〇〇〇円ヲ得タニ過ギナカッタ。
本人ハ偏屈者デ、時ドキ腹ヲ立テルガ、反面極メテ几帳面デ、兄弟間ノ貸借デモハッキリサセテイル。又、正直デ、仕事ニハ辛抱強ク、気ノ良イトコロモアル。
愛嬌ニ乏シク、社交性ガナク、ソノタメ道楽モナク、小サイ弟ヲツレテ映画ニ行クダケデアル。一人デハ食堂ニモ入レナイ純朴サガアル。休ミノ日モ、又夜間モ、外出ハホトンドシナイ。
社交性ガナイタメニ友人モナク、近所ノ青年ガ遊ビニ来テモ、口下手デ相手ガデキナイ。故ニ、交友関係ニハ問題ガナイ。
本人モ兄弟モ、皆、政治思想、労働問題等ヲ思索スル知能ハナク、家庭内デモ近隣間デモ、ソノ話題ガ出タコトハナイ。又、治安・公安機関ノ党関係リストニモ活動事実ハナイ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

結論　工員トシテ使用スルコトニ懸念スベキモノハナイト考エラレル。

昭和二十六年十月十七日

新日本探偵社
担当　辰巳秀雄

読み返しているうちに思いついたことがあった。読み終えて辰巳は白石の無表情な丸顔を正面から見つめた。「お前の履歴書、貰うてないな」

「はあ。出してまへん」

辰巳は書類に眼を落した。さりげなく訊ねた。「お前、戸籍ないのんと違うか」

「おまへん」

「そんならお前、朝鮮人と違うか」

「そうです」

その日の会話はそれきりだった。小一時間のち、白石に留守をまかせて辰巳は調査に出かけた。

辰巳は以前していた仕事の関係で現在も多くの在日朝鮮人と親しく交際していた。当時、多くの日本人は彼らを嫌っていた。戦前戦中朝鮮人をいじめ抜いてきた記憶がそれぞれにあり、戦後失うものの何もない彼らが旺盛な活力と共に擡頭してくるのを、脅えと恐れを伴っ

て見まもり続けていた。そうした感情は人口の九〇パーセント以上が中小企業に従事している大阪において特に著しかった。しかし辰巳には、そのようなこだわりがさほどなかった。

その二日後、辰巳秀雄は湊町からの関西本線で三重県の津へ出かけた。摂津紙業というノート製造販売会社の社長で牧村末吉という人物の身許調査だった。取引先のカネカ洋紙KKからの依頼だった。貸し込みになったのだ。摂津紙業は二月初めに約手二〇万円の不渡りを発表されたことがあったが、これは貸手形であり、摂津紙業の内容とは無関係であることがわかっていた。しかし四月ごろ、二八〇万円の貸倒れが生じ、支払能力が低下していた。辰巳は大阪で牧村の公簿を閲覧した。財産は何もないということがわかった。本籍地には何かある筈と思い、住民票に書かれていた津へ日帰りのつもりで出かけたのだ。

紀勢東線の津駅に着いたのは昼過ぎだった。辰巳はすぐ牧村の本籍地の役場へ行った。だが、牧村の戸籍はなかった。第三国人であろう、と辰巳は信じた。敗戦後、在日中国人や朝鮮人のことを占領国民と呼ぶのを嫌い、第三国人と呼んでいた時期があった。牧村末吉はおそらく朝鮮人であろうと辰巳は思った。戦後大阪へ来て、口頭で住民票だけ作った朝鮮人は大勢いたし、新日本探偵社へ来る依頼にも取引相手や雇傭内定者が朝鮮人ではないかとおそれての身許調査が多かった。

帰りの汽車に乗ってから、突然辰巳の確信がぐらついた。実は辰巳は一度だけ牧村社長に会っていた。調査していた取引先の応接室で偶然牧村に出会ってしまい、紹介されて職業が知れたので、依頼者こそ明かしはしなかったものの十数分談笑したのだった。牧村は辰巳が知っているどの朝鮮人とも似ていなかった。汽車が亀山駅に着いた。辰巳は立ちあがった。

牧村が日本人であることを彼は悟った。談笑していた折の何かのことばがその時汽車に乗っていた辰巳にそう確信させたのだ。それがどんなことばであったか辰巳はその時にも思い出さなかったし、あとになっても思い出すことはなかった。

白石を朝鮮人と悟った時と同じ種類の勘だった。辰巳は津へ引き返した。本籍地とされていたあたりを辰巳は夜になるまで調査してまわった。夜の七時ごろ、辰巳は牧村末吉の叔父にあたる波田龍太郎の家を訊ねあてた。

空襲で役場が焼け、同時に法務局の建物も焼けたため、戸籍がなくなっていたのだった。波田龍太郎は牧村から摂津紙業の監査役を頼まれていた。しかし会社の内情がわからないため、いったん断わっていた。甥の会社がどのような状態にあるかを、辰巳はあべこべに波田から訊ねられた。若い社長が陣頭指揮でよく社員を統べており、業績はあがっていると辰巳は答えた。ほぼそれと同様の報告書を、大阪に戻ってから辰巳は書いた。

調査報告書

カネカ洋紙ＫＫ殿

調査対象　名称　摂津紙業株式会社
　　所在地　大阪市北区浮田町十五
　　代表者　牧村末吉

特記事項　営業成績・信用度・金融状況

一、設立　昭和二十四年九月十日
一、目的　一、紙及ビ紙製品ノ製造販売
　　二、印刷並ニ紙工
一、組織　資本金三〇万円。全額払込ミ済。一株五〇円。縁故者ヨリ成リ、株主総数十五名。決算ハ十一月ノ年一回トシテイル。

取締役社長　牧村末吉　一二〇〇株
専務取締役　管屋璋司　九〇〇株
常務取締役　鹿嶽幸郎　七〇〇株
監査役　乙女谷晋　五〇〇株

右ノウチ管屋、鹿嶽氏ハ二十五年八月ヨリ非常勤トナリ、乙女谷氏ハ閉鎖機関ノ整理ニ当ッテイル。

一、沿革　社長ノ牧村氏ハ復員後ノ二十一年旭区大宮町八丁目ニテ個人経営ノ文具・紙製品ノ小売ヲ始メ、妻ノ兄ガ市ノ教職ニアルノヲ足掛リトシテ各小、中学校ヲ対象ニ小卸ヲシテイタ。タマタマ太陽紙業ヲ退職シタ鹿嶽氏モマタ、実兄ガ藤蔭女学院ノ校長ヲシテイタノヲ手ヅルトシテ各小、中学校ニ紙製品ヲ納入シテイタモノデアルガ、二十四年六月、教育ノートノ需要家撰択制ヲ採用スルコトトナッタノヲ機会ニ、両者ガ共同シテ資本金一五万円ノ当社ヲ興シ、二十五年一月、妻ノ内職トシテ寝屋川デ文具ノ小売商ヲ営ンデイタ

管屋氏ノ出資ヲ得テ三〇万円ニ定款増資シタ。

一、設備　本社工場ハ敷地約二〇坪仝地上建物二階建一棟ヲ賃借シ、主ナル設備ハ左ノ通リデアル。

断裁機　二・四尺　一台
罫線機　一台
ハンマー　一台
三HPヂーゼル　一台
活版印刷機　二四頁　一台
同　一六頁　一台
ミシン　一台

一、営業状況　当社ノ機構ハ工場部、営業部ニ分カレテイル。

工場部　工員十六名。日産一三〇〇〇冊。

営業部　社員十一名。店頭ノ月間販売高約五〇万円。市内及ビ地方ノ小売店ヘノ卸高一五〇万ヨリ二〇〇万円。右合計月間営業高二〇〇万カラ二五〇万円。

一、銀行　大阪銀行船場支店ト取引シテイタガ、本年二月初メ当社ノ下請ヲシテイタ東今里ノ製本業福本市松氏ニ頼マレテ貸シタ約手二〇万円ガ期日ニ福本氏ヨリノ入金ガ一日ダケ遅レタタメ、翌日福本氏ガ買戻シタ。コレヲ大阪銀行ハ不渡リ処分ニ附シタ。コノ事実ハイササカモ当社ニ関係シタコトデハナク、手形ヲ貸シタノミデ迷惑ヲ蒙リ、世間ノ誤解ヲ招イタ。以来大阪銀行トハ預金取引ノミデ、既発行手形決済ノミニ流用シ、現在月間動キ

高約三〇〇万円。又、本年四月、中松ノートニ二八〇万円ノ貸倒レガ発生シタタメ銀行借入モ増加シ、ソノ取引振リハ幾分忙ガシクナッテキテイル。

紀陽銀行（中之島）　短期借入一〇〇万
富士銀行（船場）　短期借入　五〇万
　　商手割引一〇〇万

又、目下文紙信用金庫ト取引シ、出資金一〇万円、積立四万円、割引枠四〇万円ヲ利用シテイル。

一、流動資産

資産之部	受取手形	20	万円内外
	売掛金	300	〃
	前渡金	10	〃
	仮払金	30	〃
	当座預金	35	〃
	在庫商品	350	〃
	合計	745	〃
負債之部	支払手形	350	万円内外
	買掛金	400	〃
	割引手形	100	〃
	借入金(銀行)	150	〃
	〃　(社長)	50	〃
	合計	1050	〃

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com